



東江先生筆話 上



東江先生書話序

我國中古以來翰墨之業已粗
且拙者其無所矜式之故也雖有
一二能忘畫者而目不觀法書口
不誦書論一決於骨髓無取法
於古人矣其書則務為旁觀之
美以投時好縱意揮灑不能自

休徒令齒舌間得利則有焉
焉得所謂透過紙背之妙此乃
欲廢規矩而為方圓不可必得也
矣夫人善自見而不知其非猶
且傲然師居衆人上自貴偏
長也若是而可謂成乎然不足
以列之善書家矣其學字之者皆

效其師之所為而不違及其他
則私自是吾所好徒費歲月
是以終身不遂於成或自稱曰學
古人書者之畢志元明不能
逝于魏晉也世之昧乎無知其
歸趣焉我東江先生居恒謂
魏晉書罕有真蹟不可得觀

亡已則墨本存矣。雖曰糟粕尚有
典刑。况千百中。或有不經重鑄
乎。其與真相去不遠也。世人
不多見。深欲廢棄之。果哉。宋之
難矣。夫自百世之下。欲得齊於古
人者。舍是物。何以哉。故無帖不
習。而帖有真贋。必擇焉。其書

專師法逸少。步武漢魏。提歐
雲。携褚陸。今宋明諸家。後從
故。無不往而擅其妙也。其教人
法。亦惟依已所造。焉首以摹
擬古法書。必欲令人得而施盡
之余。肄業之間。得聞先輩。未
散緒言。隨而錄焉。名曰書話。併

附答問茲得三卷此書之指專
要便於學習者非妄自誇張故
特國字書之以以同天下也雖然
片語必徵之古持論不苟臆斷
嗚乎後知之者被服此教則無
不即成功也然後各自造于所謂
唐人學子二王筆者之所為乃與

之抗衡必矣雖進乎魏晉亦唯
因其材焉爾其所裨益不亦
大乎自此書之出準繩一立世
之學子書者知其所由則豈必謂
先生之徒而亦私淑之類也人
尸而祝之可也雖有伎心之人必
謂然哉先生大業不已榮于天

下可傳於後世乎。別有書述若干卷。工書之家。多不讀書。則見以為詭異之言。厭而弃之。故未刊行。斯書乃為先容。明和六年己丑夏五月。

東都

橋本橋謹撰



東江書話序

夫學者以古為極。則吾亦無間然矣。唯其立志之不確。遂攻今之古。而不能為古之古。則見以為古者。亦徒從世人所曹好耳。余每語諸生曰。日月星辰繫焉。春夏秋冬運焉。山川谿谷列焉。五穀絲麻遂焉。人生於其間。心

腹腎腸眩而存焉。古猶今也。吾奚爲
不及古乎。孰知不古之古。古之不古
吾與此語久之。東江書話者出。余得
而讀之。畧識其意之所在。乃喟然嘆
曰。我書徒足以記姓名而已。焉能知
其巧拙乎。又焉能知其所以學之乎。
唯其言曰。今之不能爲古者。是不爲

也。非不能也。因審論其所以爲古。苟
人能捨己所學。以從斯言。則古之古
其庶幾乎。余則言之。禮樂之道。而景
瑞發之學。書之方。茫茫乎宇宙之間
人之潛心覃志。各有得於其所好。如
合符契然。豈不可喜乎。蓋我
東方之古。以字體有二王之迹。取於

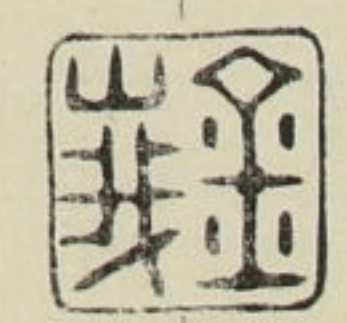
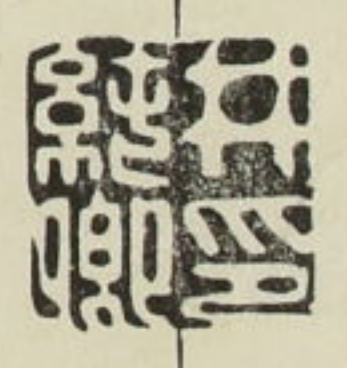
書言
彼者傳記所載。歷歷可觀。而近世稱
能手者。不足爲之奴隸。豈時有古今
使之然乎。誠敦學不得其方也。余故
謂千載之下。幸有一景瑞爲之嚆矢
矣。雖然乎。余又有告乎景瑞曰。凡人
之成事。欲取信於一時。則必有不信
者而應之。應斯悶悶。斯倦倦。斯廢果

且知世能爲古之古乎。又果且知不
爲古之古乎。其爲與不爲。要無損益
於景瑞。願景瑞處于此而確乎。嗚呼
日月星辰如斯。其縣山川谿谷如斯。
其列萬世之後。豈無有感而興者乎。
余性僻寡交。不爲世所信。而亦竊有
所期。固難爲區區流俗自安少成者。

道_甲

明和己丑夏六月

井純卿撰



一と海一乃書博士てふはさかる乃此の
 相かより一書らめをのみを一ぬるをそ
 う國よりたふみよる一やかきいたす
 一とをを一ぬれをいし一むか一り
 此道とまひはし一も海より一乃いし一人の
 かまゝかゝらいきほひり一しゝゝゝん
 一く書なる一ぬるかゝか古きら一ふみ
 一ものり乃みしちをくれはほの世

乃も海く一人の及ふ辱くも阿らます
 くよかりくうさくく書なりたるれ
 より故空海道風依理り成なるといふの記
 のをくくといひあひはくたを辱めくこと
 してくよひひのくくくくくくくくくく
 くりいあく一人をさあふもなきてれめり
 さぬくくあまうせしてあきあうくぬれい
 いあく一乃かちちいきほひ失ひくくを
 阿め乃した平かましく物まふまひま

も海くのまきくくくくくくくくくく
 せ乃中うらありよくれとるの記のみまひ
 て古をまきあふてふ人もきくくくくく
 源の鮮ぬく一年月此道をまきいはく懈
 里路てたくみりくくくくくくくくく
 たまるのみく古を涼くあふきたふとひ
 て心を清くくあ飾りりほひまう人ふま
 道あ流くぬひあくまきくく人のあまあつめ
 て三つのまきとなせと我をもかきくくく

ぬ道ちのめれとらち讀てれもひまらぬ
るふ此道そのふくぬほくくふ此書を
讀つ心をほて懈らぬまたらるるわの
つう心れきて言くなり好てかきな
泣きいみ一人のからいきほひも
そらやぬ屋かんと人のとあのみま
むらんのひらこかき

蚊田御風

東江先生書話

目錄

卷之上

蘭亭記傳來の話

十七帖に眞贋ある話

御留筆といふ話

獨草連絲草といふ話

草書よめかきといふ話

額傳神秘文并に飛白書の話

能書筆とえづりふ話

小児学書法の話

大字中字小字の話

運筆正編ある話

把筆撥鐙法の話

腕法三品ある話

法書四法の話

雙鉤摹勒の話

書家に雅俗ある話

衛夫人の書并李懷琳が偽帖名物に成り話

光明皇后寫經乃話

和漢碑を建し始り話

上毛多胡郡古碑の話

集書聖教序乃話

卷之下

唐の太宗虞世南を師とす話

張旭の書を貯て寫成り話

水神山谷が書と好む話

米元章書癖并に風致ある話

墨帖と入て王元美の詩句を解る話

免立綱が書日本に渡りし話

徐子仁が髻拂子に作りし話

宗楚客名筆を集て屏風二張一話

墨本を作りし始り話

懷素自叙帖乃話

一字值千金といふ話

趙子固蘭亭帖一八字を題せし話

鍾繇尚書宣示帖由来の話

大王書樂毅論傳來の話

一日二三萬字を寫し話

王羲之洗硯池并糸草字故跡の話

康昕惠式義献の書を贖する話

代書人并右筆といふ話

梁の元帝三品の筆を定めし話

古錢に宸翰ある話

宋の章惇石壁に書を題せし話

日本乃書中國と抗衡する話

書話目錄終

東江先生書話

門生

橋圭橘編録

蘭亭の記傳來の話

唐の太宗王羲之の書を好きたまひ。貞観年中。
詔を下して。天下にあつゆる王右軍の書をあつめ
たまひ。すでに三千六百紙を得たまひ。其
そのうちに。蘭亭の記と樂毅論ハ。ことごとくに重
寶なり。因て搨書人として。古筆とす。

官人小湯普徹趙模などいふ人へ敕詔ありて。業亭
の記と撮して梁公房玄齡以下八人よるまゝ。其
とき普徹ひそぐ業亭の記とついでたくと
けるゆへ後ハ外も傳ぐりあしとまり。徐氏法書記
かの生蹟の業亭ハ帝つぬに御座のかくそに
置たまひて朝夕に觀覽したまふ。ある日高宗仰
られぐるハ朕千秋萬歳の後吾と蘭亭乃記とせ
さくんとあたまひるにゆりて太宗崩御のとき玉
の匣に業亭の記と貯て固く昭陵へとせめられ

尚書故實 太宗加つて業亭の摹本を諸國の
ていまつりとき。宣武といふ不めてハ玉石一
きざしける。是とせに定武とす。業亭ヲ博儀といづ又歐陽
詢褚遂良の輩臨書せしと。唐臨本となづく。是
より以後摹本まらくにわけて甚多し。宋の
賈似道ハ蘭亭一百十七本をあつめて雕刻せり。名目
多々れバソいも及びごとし。明の周憲王のあつめた
ひ一葉す帖ハ世に多くあれはる人も又多る
べし。

十七帖に真贋ある話

王羲之の十七帖はもと唐の貞觀年中御府のうら
 にとせられたる書なり。すべて二十七帖あり。これ
 と十七帖といふ書卷の首の一帖に十七日といふ字あ
 るゆゑにそのとどめの字とごりて一巻の題跡と
 十七帖と名づけられしなり。帖の數とごりてりた
 らしむ。昔より十七帖ハ逸少王羲之蜀の太守になく
 たる書なりといふ。志王羲之も蜀の太守に
 つうとたるにあらず。その帖中に蜀の事と多く

のせしむ。周益州王羲之へ與へたる書なりと。宋の黃伯思
 が説に及ぶなり。斯今の代まで重寶して傳ふるを
 みるに。一ハ唐摹十七帖とて。末に勅の字を大書し
 たる本あり。是ハ先唐の刻本なり。代々摹傳と
 て。字畫もあやまるふあれど。もとたゞ一きかなり。
唐摹十七帖を縮字として文字をたらせり
 書くる中あり。後世好む者書なり。又一ハ前後に大觀淳化
 の印ソウリヤウ雙龍圓印エン。その外諸家の珍藏印と多く押。
 孫過庭ソノの跋バツを附ツキたる本あり。此本吾邦へ多く後
 つきて。すでに翻刻の本もあり。世にたましく右軍を

学ぶなんぞいふ人あれど多くは是を学ばんと
 して空を穿するものなり。されど是はもと好む者
 の擬倣して作りきるを利にさしき書肆の輩。
 板に雕て人を欺きしるなり。それのなからず。朱
 子の馬莊甫が摹刻の十七帖へ題せしれ。跋文を
 きりさきとて。孫過庭といふ名を書き。此帖の跋
 といはれり。畢竟は邦めて庭訓往来今川状な
 らぬ。尊圓御筆など題騙して。児童とあがむく
 輩のむなるべし。此外中華めても。市塵の俗を

八贖ガシ作サシ多し。ひろく法帖をえておのづから。

御留筆といふ話

書畫にたくみなる人。王侯大人ふつて。その主君
 他へ書畫の多く出ん事をとりみて。その人の心
 まに書畫をうせざる事と。御留筆といふは。そ
 りよりいひはるるりめて。境地でまきこるに
 思ひし。中華もそのたが。あつと。宋の崇寧年
 中。米元章と同く。書畫博士の官ふたり。李時雍
 といひし人。ある時勅命によりて。禁中めて跨教魚と

二大字を書きたる。なかばよいたる時。あつてつゝんる
 にいできけるゆゑ。宮中の婦人われもくと花めて
 つくつゝるかんざしと。李時雍がかうべにさしけるま。
 思はずも頭めかんざしみるくつゝり。これより
 て。高名元章が右ふ出きりといふ。うぬどに魏を
 かゝぬりし人なれば。帝もその書の外國へ出んる
 ととみかゝりて。勅命あるて。絳色の紗を以
 て。李時雍が臂に封をつけられ。勅をかゝるにあ
 ざれば。書とつすつゝりとゆるされざりしとな

了。書史會要
ふんていり

獨草連絲草といふ話

草書とつづる。古人おのく體とるれども。
 其法を推せば二途にすぎず。唐より己あの人
 の草は多く獨草とて。つげて書ことなし。とつ
 きいゆるふ。も三字にすぎぬ。蘇之。献之。その外晋人
 の諸帖めてみるべし。堯亮章が論に。古人の草を作
 るハ。今人の真を作るがどしといひ。又一筆めて
 数字をかゝりて書と。連絲游絲の草となづく。

唐の張旭。懷素などの草書はなり。これハ皆熟習精
 通せしものなり。未練の人の及ぶ所にあらず。そ
 れとありくまぬば。うるとして法度にもむくす
 くなよるべ。宋の黃伯思が草書の論に。草の狂怪な
 る。書において下とす。たゞ拙目と障るにたるとい
 ひ。堯堯章ハ連絲游絲乃草。古人不出るといども。
 奇とする。いもいもいもいもいもいもいもいもいも
 されバ狂怪連絲の體をまるとする。一時の戲
 作せんハ無もあるべし。全體書とす。つらき。達

者にもや。作るもと氣象なりといはれて。匆匆
 く書出さんハいかになり。されども知る人
 ハ是にかとろき。賞歎する事なり。宋の郭忠
 恕が草ハ狂すといひ。蘇子瞻乃草ハ走るがごと
 といひ。と。一編に記したる。いづれハあざ
 明の豐道生が論に。草書と學ぶに。章草及び二
 王^{羲之}之の諸帖となり。ひ。その後張旭懷素と學ぶ。
 是編傍の來歴を知て。のち變化草聖となれ
 とつり。初學の人らるあざきるなり

草書讀かゝるゝの語

宋の張丞相名高英 字天學草書と云ふて書々。あゝ
 時詩の句とえて紙筆と云ふてとて書つゝ
 ぬるふ。あゝとふ蛇の飛動トウするいきほひあり
 さてかの作らるゝ詩と。その姪ヲヒいめしてらるゝ
 一ゆげと云ふ。運動トウカウ從シヨク横ヨウに書らるゝなり。れはよ
 めと云ふあり。姪志ばらとあんで。うつはあ
 字と云ふて。是ハ何と云ふ字にやと問はれ。丞
 相と云ふと云ふるなり。ていひたるは。汝何と

てうと問はずて。予以ゆめれさせらるゝと云

一と云ふり。冷齋夜話

額傳神秘文并に飛白書の話

額傳神秘文といふる。吾朝古来より筆道家に
 つゝて。別に言ひなる説もあつたや。中華にてハ
 薛稷セツが惠普寺の額。葛洪カクが天台の觀クワンの飛白。歐陽
 詢ユンが道林寺の榜。柳公權リウが國清寺の榜。米元章ミが
 太一殿の書法。已上 別見くわくとあそ。うりところとす
 べし。此外めいたる明の太祖のとき。大學の集賢門の

題署と。唐希原センキゲン小くせきまひいふ門の字の句
賢路ケンロとふさぐとて。けづりくむひとらふる。
是とと陰陽家者流小出い説を用ひくふな
べ。按するに。元の鄭杓テイキョク署書の論に。唐のとき題
署の法に忌諱キギンとらふるありて。點畫分毫テンクワフミョウの未
去らぬく名字と立て。陰陽五行の應オウと論する
るあり。そのくなると。陰陽家者流小出て。世に廣
成子オウコウが應侯法。僧一行ソウイコウが釋微集シヤクビシツ。燕卿エンキョウ大師の明簡集。
萬仙翁マンセンウが勅字集。應神集。白雲先生の筆論玄鑿。

なまじい書ありて。きこめて署書の法とよ
とあり。空海入唐のとき。かやりのりとき及れ
て。書法を用ひしれと。後人傳つて神祕文とい
ふや。白石先生の説。弘仁の朝。空海詔を得て。
殿門へ署せしれ。額と。石清水にある八幡宮の
三大字も。空海飛白の體を用ひてしれと。世の
書學者ハ。神祕文なまじり名つけいふやといれ
し。實に高識といふべし。飛白乃書ハ。漢の末魏
のころめ。宮闈小題書ミヤノチノチせし體ありて。近世の影書コウショ

とけくたるもや。たゞ世に三線飛白五線
飛白といふものと云ふに。古人に出る體も又云
ず。今ハ名のみ傳つるもにたりたり。

能書筆と云ふつゆの語

能書筆と云ふつゆといふも。もと歐陽詢ハ
紙筆と云ふつゆにて皆よくつゆのつゆ
といふより。云々いふなり。然れども。これハ
率更と賞美せし辭なり。すべての能書筆
と云ふつゆといふにあつて。趙子昂も。紙筆意

にかたゞこれに能書といふもよくせむ。これを快
馬泥滓のつらと好にたふといふ。又明の周顯
宗も善書筆と云ふつゆといふ通論にあつぬ
よ。といつゆ。衛夫人ハ崇山の兔毛を用ゐて筆
と。王右軍ハ鼠鬚筆を用ゐ。歐陽通歐陽詢ハ裡
毛と筆と。管ハみる象犀を用ゐたるの類。古
來能書の人筆と云ふび用ゐる。然るなり。

小兒學書法の語

小兒學書の法ハ八歳より十歳おつるまで。大楷

書とよめるべし。大唐中興頌。東方朔畫贊碑。萬安橋の碑の類なり。十一歳より十三

歳まで中楷と学ぶ。九成宮銘。虞恭公碑。姚恭公墓誌遺教經の類。十四歳よ

り十六歳にいりて小楷と学ぶ。宣示帖。戎路表。樂教論カ命表。曹娥碑の類。

十七歳より二十歳いりて草書篆隸まじりて学ぶ。蘭亭序南朝の叙

聖教序。陰符經。献之帖の類。その後草書篆隸まじりて学ぶ。

元の鄭杓が字書次第の圖ふりていり。又中華の

て。俗間の小児書とよぶ。上大人丘乙己化

三千七十子。小生八九子。佳作仁可知。礼とよぶ。廿

四字と天下一同。小兒とよぶ。祝枝山猥譚。小

み。孔子の父叔梁紇。一とよぶ。つる所の書

に託して。筆畫のすくなき文字とあつて作

れり。中朝の小児書。字のほゞめ。いろはとよぶ。か

おと。上大人とよぶ。父とよぶ。まつるとよぶ。丘とよぶ。孔子

とよぶ。のたまふとよぶ。己化三千七十子。孔子の徳

に化する所の弟子。すて小三千人におと。り。小

小生八九子とよぶ。そのうち八九七十二人。身六藝。小

つと。て。人とよぶ。て。これ。仁とよぶ。ひれ

とよぶ。の筆。とよぶ。とよぶ。とよぶ。

大字中字小字の話

世の毛邊紙一張二三字ほど書たるを大字といふ。中華めてハ字形三四寸よりこよとは皆大字といふ。山谷文集に。大字ハ塵鶴の銘にすぐるなり。一とあり。いふころハ。塵鶴の銘ほどなる字を字といふ。ときハ。そのこよの大字ハ。いふほどなるにても。いふ。と。いふ。塵鶴の碑ハ。梁の陶弘景が書めて。久しく山石の間ふづもれあり。一と。明のとき。顧元慶といふ人。雲中舟とく。て。京に山石の下めて。

もつゝ。搦してあり。是より又世に傳ふといふ。今玉烟堂法帖小模刻あり。又董其昌が書畫禪隨筆にいくく。予襄陽が天馬の賦と云る。すすて小四寸。そのうち一本ハ。壁窠大字なりとあり。董其昌の筆の足々れ。ハ。皆生蹟なり。そのうち壁窠大字といふ。今世上に多くある。と。いふ。小畫馬の圖と書たる墨本なり。字形一寸ほどより中字といふ。虞世南の孔子廟堂の碑。歐陽詢が冷泉の銘の類といふ。二三分なり。と。小楷といふ。羲之の樂毅

論。東方朔畫像の贊。黃庭經。孝女曹娥の碑文の
 おもきといふ。ふとれ小ききと。蠅頭書といふ。褚遂
 良の陰符經。顏魯公が麻姑仙壇の記。米芾が西
 園雅集の記の勢なり。以上小楷ハ。傳言。錯法帖。戲鴻堂
 法帖。其他の法帖中。あり。

運筆正偏ある話

書法に正骨とて。偏ハ態とて。とあれば。二法
 ともに缺てハなりがごとし。正ハ字とて。偏ハ筆の
 ごとし。古人
 小ハ正鋒偏鋒といふ説あり。その正鋒とて。と
 す。ハ。唐の柳誠懸が意云。りりれハ筆正と云

しよりおろる。是ハ公權誠懸
 字筆にこそよせて穆宗ホウ
 ソウ
 帝と諷諫せしとばなるを。すべて用筆の法。正
 鋒のこと思ふハあやまりなり。歐陽公永叔も。余指を
 のぐすにあらして腕志すといひ。東坡も。筆
 とめらるるとき。左右前後款側をまぬれず。そ
 のまぬりるとき。上下繩と引。がごとし。是を
 筆正といふといふ。右軍。太令の草。張旭。懷素
 の書。時々偏鋒を用ゆ。明朝。亦も祝枝山ハもと
 らび法を用ぬ。文徵明が小楷も。時々偏鋒を出す

と。王元美の菴苑危言小尺くくり。

把筆撥鐙法の活

把筆の法を撥鐙といふ。筆をとるたるかゝらま
とふりて。馬鐙に似るるとたり。以法義之
献之より代をとて。唐乃李陽冰のいりるまで。妙
なりとて傳授せしる。唐の韓方明。盧携。南唐
の李后主とくくめ。諸家の論甚多く。然れども。撥
鐙の妙つめてくれといふは。筆を雙鉤にとる
なり。雙鉤といふ。第二指と中指とくけておといふ。

かやくいふととて文字をゆれば。筆力自然と

道勁なりと。古人の稱美せしる。と。篆書を

作る小ハ單指と申也。單指ハ第二指
とくくけるを云。筆の尖と燈火

おてすくくやきて申ゆべきなり。元の吾衍が字

古編小尺くくり。

腕法三品ある活

腕法に三品ある。枕腕提腕懸腕といふ。枕腕を。

案上めて。右の手を左の手の背へおせて書といふ。

提腕ハ肘をくくりと案小つけて。手端をとくくして

書とよ。懸腕ハ臂ヒチとくあり。手と空クウにさし之
 て書とよ。杖腕ハ小字に用ぬ。提腕ハ中字と書。
 懸腕ハ大字と作るに用ゆ。もつとも力あるがゆゑ
 なり。翰林要訣又明の徐渭ジウヱが論に。古人ハ大小の字と
 もに。皆懸腕と用ねるなりといひり。

法書四法の法

書法に臨摹響搨リシモモキヤウタカ硬黄コウワウといふ四法あり。臨リシとハ
 見しつゝしりするなり。摹モハすきさしつゝとよ。
 響搨ハ日の光りとりけて古法書とあてり。

つするなり。是ハ古人の書。絹めても紙シでも。筆
 久しくおふる。したる。いづのぶとくありり。
 ついにせられ。よくみえがくきかゆゑなり。又
 響搨キヤウタカと影書エイシヨともいひたる。丹鉛録ニタンケンロクに云く
 ころ。硬黄ハ蠟ロウひきの紙を以て古帖とつたを
 つフ。明メイの李日華リジツカ論書ロニシヨに。
 輟耕録テツコウロクに。宋ソウの晁堯章シヤウヤウチャウが論に。臨書ハ
 力を以。摹書をイカチ位置イカチとほるといひり。書とよふ
 には。二法ニホフふよとされ。すみぎ。

雙鈎摹勒カウコウモロクの法

書言 一 雙鉤廓填。雙鉤墨填。廓填ハ
 吾邦小いなり。こ字ふく文字の廓填ハ
 墨填ともいふ。こ文字の中へ墨をぬりぬる
 といふ。是ハ古人の書と學ぶんとおもふ時。真蹟
 墨本にかきかへず。直に摹せんす。墨の透トクり
 けんるすとき。直に。まづ雙鉤にとりて。墨をぬ
 りぬる。影本となれ。又背朱シユとして。雙鉤のこりれ
 しくより朱をぬりぬる。續書譜にみえ
 たり。皆古書をおさむる法なり。

書家に雅俗ある話

宋の黃太史山が説に。士大夫數萬卷の書と讀
 る者。筆を下して。氣象シヤウくくめて。俗態ソクは
 忘るる。されハ楷書吏のこといひ。又明の吳寛も
 書家の文辭ブンジとよくせざらば。その筆畫俗めて。但
 一書工イッショウコウなる。と。世の書と學ぶ人。詩文とよく
 せざれば。吾いまぐ書とよくすとみづといふ。傳
 邦クニめても。學才なき人の書ハ。入るふらぬ。い
 んや代ととりて。ひうと慕ひ。國とる。てそ

の體ライと字ふに於いてハ。字才なき人見識もひ
けず。その書おのづから俗態をなすも亦とこり
なり。も詩文をよむべし。實み書と好む
となく。その典刑テンケイとする。法書を見。論議ロニと讀ヨミて
古人の心を明アキラかす。かむさもく。ぬニき
ぞ。近世書と以て名高き人多くあれど。や
や明末書家の奴書ヌシヨとなりて。古人のいふ
名家達人のあるも志シす。古來書家の沙汰小
おろんでハ。趙子昂文徵明チウシヤウブンシチメイなどくもく。かむさ

それとて。同ド代の人なりと。かむさ。小車もあ
る。く文盲なるも。く。く。古法帖をみる。ハ
字彙。韻會のどく。たゞ字體を檢出ケンシュツす。乃
用ヨウなりと思ひ。或ハ又法帖を習ナラふ。墨イシ本體テイにて
用ヨウふ。之がく。な。その墨イシき。い。て。
筆ヒツをみて。ハ。大。小。害ガイをなす。と思ひて。吾ガも
ぬ。ま。に。ひ。く。も。制セイ。と。めて。古人を毒ドクに
ひ。く。思シふ。ハ。口ク。と。き。す。な。ず。や。た。と。て
い。く。愚癡グチの老婢ラウビ。談義タンギ説法セツポフを信仰シンギョウして。一切の

佛書とくくぶくどく。それくの人。法帖の法
 の字ハ。何と訓ヨムとら得てあるや。おぬつうなり。あま
 一書家。明人の墨本と云く。そのくは。衍文ヒトコの
 而に一圓ワンを加へて。點竄カンしたると。筆畫なりと
 おもひ。おもく。ろき字なりとて。後々の文字を
 書たひハ。圓ワンとくく。是は法帖をえたるぬ
 る弊ツライエあり。又ハ。文意を解トクせぬ。衍文ヒトコなり
 とも。志く。ざるゆゑなり。とく。顔魯公の魚
 坐位帖サイイなりと云ハ。文字の縦横スビ一助スビを引なりと

とくく。思ふなり。とみわく。不知シラく。ざる。ハ。知
 ず。てやむも亦よく。とく。

衛夫人エイフジンの書并に李懷琳リクワンリンが偽帖名物ナモノハ。白話

衛夫人エイフジン 名鑠字茂孺ハ。晋の汝陰の太守李矩リキョクが妻なり。とく

鍾繇シュウヨウ法の正書をつくりて。妙に入り。王逸少ワンイツショウと
 め師として。学びたり。その書一帖。淳化閣帖ジュンカクテツにのせ
 てあれど。唐の李懷琳リクワンリンが偽蹟イツセツなり。又懷琳クワンリンが偽帖
 ありて。名なきもの。晋の七賢帖シチケンテツなり。傳デンあり
 館法帖カンホフテツに。嵇康キコウが絶交書ツエツカウショあり。名あり。ハ。介ケイ魏エイ

晋の能書名のてめて真蹟をつくぐもの多し。
〜むべし。

光明皇后寫經の詠

光明皇后寫經のきれなることいふもの。手鑑のうらみ
ハかろ〜すのせつありいみ〜(宮中おて經をうつ
するすねくれ〜ハ。和洋同〜すめや。宋の張端義
が説に。真定大歷寺の藏殿おとさめ〜る經ハみる
唐の宮中の婦人の書なり。經尾題名の字。きハ
めてみつべし〜とりふ。又趙子昂の室管夫人もまづ

〜全副經と數十巻うつして。名山母とさめ。高
僧に布施せ〜れ〜るある。異朝歴代女流の
能書多くある中に。その書を碑碣にきざみた
るハ。たゞ唐乃房璘が妻高氏一人なり。集古録
にのせ〜る。太原府石壁寺の碑行書。安公美政の
碑楷書。ともに高氏の筆なり。此外女筆の碑
なり。吾朝にハ。南都茶師寺佛足石の碑。和歌二十
一首。光明皇后の書。存して今みつ〜ふ。上代の風
流。異朝にや〜るもの多し。

和漢碑を建一始末の話

碑とて一三代のあらうりそは、
 夏の禹王岫嶽山の碑。石墨鏤華にいく。衡嶽の雲峯にあり。 周の穆王壇
 山の刻石。吉日癸巳と四字なり。 宣王石鼓の文。古今法書苑にいく。其文史極が大篆なり。
 孔子の書殷の比干が墓。七修類藁にいく。殷の比干が墓四字。石断て字缺なり。 呉の季
 札の墓十字。廣川書跋にいく。孔子の書なり。 とて、秦にいくとて、
 李斯が嶧山の碑。泰山の碑。會稽の刻石。之罘山の刻
 石あり。前漢のときハ碑碣とてなきなり。歐陽
 永叔の集古録に見えたり。後漢のとき。國子學堂

のまゝに五種の碑をえり。とて二十五碑ありて。
 蔡邕に命じて篆科斗隸三種の字體をとて。
 表裏に文をきざめり。これより後。家墓碑とて
 ひるぎ甚多し。集古録。金石録。諸書にまじり。 吾朝に。經碑。頌徳の碑
 などえり。れり。ハきく。經碑ハ。詩書礼記ホの經書を
 泰山なまのの墓碑を建し。れり。ハ。大職冠鎌足乃
 碑文。日本書紀のうらにえり。おれ。ハ。そのくめ。れ
 ぐり。ね。さ。き。の。代。め。や。な。る。ち。ん。奥州の壺碑ハ世
 のら。ふ。な。れ。バ。論。ず。に。及。ぶ。ず。那須の國造の碑ハ

持統文武の時代にまゝれしや。そのころの石碑を
 撮るとなるとみづるが。おとこふ千歳ともなう古石
 とて。愛すべきものなる。その年月を繕る
 るよりすれば。文字も多く訛缺して。文義解
 ぐべき不あり。碑文のよどめ。永昌元年己丑四月と
 あり。按ずるに。永昌元年己丑ハ。唐の則天皇后の
 年號にて。吾朝持統天皇の三年にあたる。はつき
 本朝の年號つけざる。ゆゑに。異朝の年號を
 假用せられたるなり。考ふべし。

上毛多胡郡古碑の話

寶曆甲戌の秋。某上野の國に遊ひしとき。南
 牧の高橋子啟と曰く。多胡郡池村と云ふ所
 に。いさゝか古碑をみよ。その碑文にいさゝか。弁官
 符上野國片岡郡緑野郡甘良郡并三郡内三
 百戸郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日
 甲寅宣左中弁正五位下多治比真人太政官
 二品穗積親王右大臣正二位石上尊左大臣
 正二位藤原尊とあり。續日本紀を按ずるに。

和銅四年三月。上野國。甘良郡。綠野郡。片岡郡
の。ららして。六郷を割て。別に多胡郡を置や
あれ。ば。碑。ハ。その。とき。に。建。れ。たる。一。一。
た。碑。文。の。ら。ら。に。給。羊。と。し。る。義。と。つ。ま。び。り
う。に。せ。ず。亦。の。人。の。つ。こ。し。を。き。げ。ば。む。し。け。不
に。羊。の。大。夫。と。い。ひ。一。人。あり。よ。き。就。駒。と。と。て
つ。ま。つ。こ。に。け。こ。ま。れ。の。う。て。奈。良。の。都。へ。朝。一。つ。
その。う。つ。れ。き。る。小。童。を。八。束。小。脛。と。い。ふ。は。童
子。身。に。肉。の。翅。あり。て。脛。の。も。と。八。尺。あり。され。に

より。て。よく。就。駒。み。つ。き。て。あ。ゆ。み。一。か。く。は
名。つ。け。ら。る。と。ら。あ。り。あ。る。と。き。故。あり。て。朝。覲。せ
ざ。り。一。く。讒。者。ひ。ち。を。と。り。こ。ひ。て。羊。氏。が。不。廷
の。罪。を。奏。し。す。な。ら。ち。官。軍。を。さ。し。下。さ。る。
その。い。く。さ。利。あ。ら。べ。り。て。羊。氏。づ。づ。づ。到。お。て
と。北。一。ら。る。が。その。首。と。んで。池。村。と。い。ふ。所。に。落。と
つ。因。て。その。所。に。碑。を。建。つ。と。い。ふ。時。小。就。駒。も。雲
に。の。り。て。と。び。さ。ら。ぬ。その。古。記。を。馬。蹄。山。瑞。雲
寺。と。い。ふ。又。羊。氏。の。妻。家。宰。た。ら。び。み。七。人。の

女福シヨクもに落合オチアヒといふ所まで海のびらるが。
官軍に追オヒつめられ。うめて生害せら。因ては
所とならふといふ。七輿山宗永寺を建つ。
今もそのほとりの男女瘡キヤウとくれあるといふ
れば。羊氏の碑に祈るとさかひ。かみくげある
一ある。するくら川瀬の丸き石をとりて。廟あ
に献して成就の志するといふ。これくは
神標となす。ききるにもあつねと。その古蹟なり
とて。今ものこりてあられ。佐古羊の大夫といふ

人のありしもきくべ。石上尊。藤原尊といふ尊の
字ハ。朝臣と書きふと。貴ひて尊の字に書しな
るべし。公卿補任に。左大臣正二位石上朝臣麻呂。右
大臣正二位藤原朝臣不比等とあつと。石上尊。藤
原尊と書しる。他にハ。えさず。万葉集にの
せらる。石上乙麻呂卿。古佐國へ配せしる歌に。石
上振乃尊者弱女ミコトハ乃とあり。日本記に。至貴曰尊
と註せら。然れば。その人を貴ひて尊の字を用ひ
たるなり。其一時の事とす。東涯伊藤氏の去盡カクツ録レキ

録に。び碑の圖をのせしむる。石上と藤原の下
の字。蝕ハシシである。うな。びとある。これいまのあこ
ろみざるゆゑのやあ。ん。さ。和銅四年ハ。元明天皇
の朝まで。寶曆甲戌の年まで。千四十六年があひび
る。か。ゆ。に。年。種。稀代の碑なれど。誰か
も。さ。ず。む。草カク莽マウの間。小。づ。も。れ。あ。り
し。を。何のさいとひめて。り。え。る。を。ほ。こ。う。
よ。お。いて。と。ど。めて。一本を。搦ウチて。持。歸。り。子。啟。と。せ。に
これと摹刻して。同好の人。く。へ。お。く。り。れ。ば。

今ハ世に志る人も多くなりぬ。この碑羊大夫の碑
といふれ。かの晋の羊祐ヤウが。墜ダ波ハの碑を。号ひて。
く。く。の石に詩一首を題して。い。く。下。片。羊。公。
碣カク。素ソ傳ト。絶セツ妙ミョウ。辭ジ。石イシ。當トキ。青アヲ嶂サカ。出デ。字ジ。映ウツ。碧キナヲ。苔コケ。滋シ。雨アメ。洒シ。龍リウ
文怪。雲飛。鳥跡奇。悠然千載下。悵望淚先垂。
めで思ひ。ゆ。に。その日の。さ。ぶ。と。一。み。て。な
が。め。き。唐の歐陽率更リツハ。索靖ソクが。書。る。古。碑。と。見
て。馬。と。と。めて。これ。と。え。る。や。久。し。く。
さ。り。が。ま。こ。る。より。お。り。て。え。と。ま。つ。と。これ。

とき種タネをいさく座イてえける。遂スにふの目と
ついで二三百回廻マワりてさうイと。國史異纂李陽
氷ハ碧落の碑をみて。そのもとに寝臥シ。數日さ
るあイとすずイとイ。廣川書跋さもあイんとイ。

集書シヤク聖教序シヤクノジヨの話

碑文と書に。集書とて。古人の字をあつめて。今人の文と書るイある。唐の太宗の御撰あり。三蔵聖教序と。碑石ふきざられイとき。褚遂良。王行滿タウ。びに僧懷仁に勅ありて。その序文と書せ

られ。懷仁ハ王羲之の書をあつめて書イり。
これ集書の碑乃始イとて。その塏開元年中。
興福寺の僧大雅も。右軍の書とあつめて。吳文が墓誌と書す。その碑を明の萬曆年中のすゑ。西安城の月イとてほり出イるが。季代イと碑イをれば。石半イ破壊す。因て半截イの碑と名イつけイり。金石文字記明人の墓碣誌銘イも。集字イにて作イるとイとイるに。多くハ皆懷仁が書と原イとて集め作イり。唐の吳通微兄弟。懷仁が集

碑と云ふんで有り。宋朝の翰林侍書の輩
 の書。多くは碑と云ふ。その書體を名けて院體
 書といふ。黄伯思の説吾朝まで。古来より集字の碑碣
 を建てる事も有る。その以菊間キクマの平佳胤上総
菊間其父日章齋の墓碑を建つ。某唐の李北海の
 書をもつて集めておく。ぬ。唐書に北海の太守李邕
 むも碑頌に長く。前後碑
 文をあるがひり
 八百有といふ。是を吾邦集字碑のとらめとや
 といふべき。集字法
 別見

東江先生書話



